

## 妊娠中の薬物投与

聖路加国際病院女性総合診療部医長

山中 美智子

(聞き手 池脇克則)

妊娠中の薬物投与についてご教示ください。

1. 妊娠中および授乳中の女性に対して風邪症状の治療をする場合の注意について（授乳中の場合、子どもが何カ月あるいは授乳が1日何回程度まで注意が必要か）。
2. 婦人科において抗生剤投与でカンジダが発生しやすい方の場合、どのような薬剤を選択すべきか。

<福岡県開業医>

**池脇** 山中先生、妊娠中の薬物の使い方ということで、私自身、妊婦さんが来られて、風邪薬といわれても、極力出したいくないなと思っております。やはり妊娠中というのは、もし胎児に何かあったらということが非常に心配になってしまいます。まず先生にそのあたりの基本的なところから教えていただきたいのですが。

**山中** 妊婦さんにお薬を出すときは、確かに慎重にしていきたいというのは基本的にはあるのですが、妊娠の時期によって、薬剤の影響が変わってくるということをまず知っていただければと思います。

妊娠の週数の数え方ですが、最終月経の開始日を起点にして、280日目、40週0日が予定日というふうにして計算していきます。赤ちゃんの内臓の原基といわれるものができる器官形成期はだいたい妊娠の8週、9週ぐらいまでで、それまでにほとんどのものは出来上がってしまうのです。

ですから、産婦人科以外の先生方は非常に奇形のことを心配されるのですが、奇形に関して気をつけていただきたいのは、妊娠の初期になります。器官形成期は8～9週なのですが、その後の臓器分化などのことも考えると、気をつけていただきたいのは16週あた

図1 妊娠の時期による薬剤の影響の変化

妊娠の時期	薬剤の影響
4週未満	胎児の器官形成未開始。母体薬剤投与の影響を受けた受精卵は、着床しなかったり、流産してしまったり、あるいは完全に修復されるかのいずれか。ただし、残留性のある薬剤の場合は要注意。
4～7週	「絶対過敏期」 胎児の体の原器が作られる器官形成期。奇形を起こすかどうかという意味では最も過敏性が高い。この時期には本人も妊娠していることに気づいていないことも少なくない。
8～15週	「相対過敏期」 胎児の重要な器官の形成は終わり、奇形を起こすという意味での感受性が低下する時期。一部では分化などが続いているため、奇形を起こす心配がなくなるわけではない。
16週以降	胎児発育の抑制、胎児の機能的発育への影響、子宮内胎児死亡、分娩直後の新生児の適応障害や離脱障害が問題となる。

りまで。それ以降は、奇形というよりは、今度は胎児への毒性の問題になってきます。

それから、もう一つよく心配されるのが、妊娠と気づかないうちに使ってしまったお薬についてです。妊婦さんが妊娠に気づかれるのは、ちょっと月経が遅れた5～6週頃のことが多く、この頃はすでに器官形成期の真っ最中です。しかし最終月経から4週以内というのは、いわゆる“all or none”の時期というふうにいわれていて、何か異常が起これば流産してしまう、あるいは着床すらしないし、生まれてくる場合はまったく影響なく普通に生まれてくるということがわかっているの

で、4週までの時期は比較的心配がいりません。

つまり、最終月経から4週から16週あたりまでの間は、奇形に関連する薬剤は気をつけていただきたいし、それ以降は胎児毒性の問題があるので、今度は奇形とはまた違った意味で少し慎重に考えていただきたいということになります(図1)。

**池脇** 胎児への影響といいますと、胎児への直接的な作用以外にも、胎盤を介してとか、幾つかあるのでしょうか。

**山中** 大半のものは胎盤を通して胎児に移行することによって、いろいろな副作用、胎児への影響が出てくるの

ですが、一つ注意していただきたいのが、子宮収縮を起こす薬剤です。産婦人科領域で子宮収縮剤として使われているものは、もちろん皆さんご存じだと思うのですが、内科領域で使われることがある、胃潰瘍に使われるミソプロストール（製品名：サイトテック）です。このお薬は強い子宮収縮を起こしますので、妊婦さんには絶対禁忌になります。海外では流産させるために用いる薬剤ですので、ぜひこれに関しては覚えておいていただければと思います。

**池脇** そんなに繁用される薬ではないにしても、これは頭に入れておいたほうがいいですね。

**山中** そうですね。

**池脇** では、質問は妊娠中および授乳中の女性に対して、風邪症状の治療で、どういうふうにご注意したらいいかということです。これに関してはいかがですか。

**山中** 確かにこれからの季節、妊婦さんの風邪あるいはインフルエンザが問題になってくる時期なのですから、一般的な上気道炎、いわゆる風邪症候群の場合は、できれば薬剤なしで経過できればと思います。例えば、一般的な総合感冒剤みたいなものは基本的に影響ないといわれていますけれども、万が一赤ちゃんに何かあったときというのは、どうしてもお母さんたちは「やっぱりあのときの薬じゃない

か」というふうに結びつけて考えられることが多いので、私はお薬を出すときには、よほど症状が辛いのであれば、それを緩和する作用はありますけれども、風邪そのものをよくする力はないのですということをお話しして、それでも夜眠れないほど咳き込んだり、鼻づまりが辛いといわれるときには、一般的な総合感冒剤や、あるいは咳止めの薬も一般的なものを処方しています。

**池脇** 特にだめだというわけではなくて。

**山中** はい、そうです。ただ、投与されるときには一応添付文書を見ただくといいと思います。去痰剤でムコダインが繁用されるのですが、添付文書には「投与しないことが望ましい」となっているのです。「投与しないことが望ましい」と書かれているときは、処方しないでおくほうがいいと思います。投与するときの基本は、わりと古くから使われている、繁用されている薬を使っていただくというのが一つのポイントになるのではないかと思います。

**池脇** 感冒薬というと、主には抗ヒスタミン剤、そして解熱剤、場合によっては抗生剤、今いわれた去痰剤となりますけれども、抗ヒスタミン剤と解熱剤に関しては、いかがでしょうか。

**山中** 抗ヒスタミン剤は、第一世代、第二世代、何々世代とあると思うのですが、第一世代は古くから使われてい

て、経験も豊富なので、問題ないということがわかっています。第二世代もほとんど問題ないのではないかと思います。新しいものを出すときは、まだデータの蓄積がそんなにないので、少し気をつけていただくほうがいいでしょう。いわゆるオーソドックスに使われているものを使っていただくということが大事だと思います。

あと、解熱剤に関してですが、NSAIDsは胎児に対する毒性がいわれておりますので、妊婦さんに鎮痛剤あるいは解熱剤として出すときには、アセトアミノフェンに限って使われるのがいいと思います。NSAIDsは、胎児の動脈管といわれる血管を収縮させてしまって胎児心不全を起こしたり、あるいは、尿量を減らして羊水過少を起こしたりすることがあるので、ぜひ鎮痛剤、解熱剤も注意していただきたいと思います。

**池脇** 先生がおっしゃったことは妊娠中ということですが、授乳中はちょっと違った考え方になりますか。

**山中** 授乳婦さんであっても、一般的な感冒薬はそんなに心配はないと思います。ただ、お薬を飲んだ直後の授乳は避けるとか、あるいは授乳した直後にお薬を飲んでいただくということで、乳汁への移行を少しでも減らすことができるので、すごく心配される方にはそういう指導をしていただくのもいいかもしれません。

**池脇** 子どもが何カ月、あるいは授乳が1日何回程度まで注意が必要かということですが、これに関してはいかがでしょう。

**山中** 当然ながら、日にちの若い赤ちゃんはまだ代謝系がしっかりしていないので、特に新生児の場合には少し注意が必要かと思います。授乳の回数とは関連がないと思います。

**池脇** 感冒で抗生物質はそもそもあまり適用はないと思うのですが、もしそういったものを出すときには、どういった薬を使われますか。

**山中** ペニシリン系かセフェム系であれば、安心して使っていただけます。

**池脇** 話がずれますが、インフルエンザのワクチンは妊娠中に使ってもいいのでしょうか。

**山中** 妊娠中も安全に使えるということがデータとしても出てきているので、特に妊婦さんの場合は重症化しやすいということがいわれていますので、むしろ積極的に接種をお勧めしています。

**池脇** もう一つ、婦人科で抗生剤の投与でカンジダが発生しやすい方の場合は、どういった薬をという質問です。いかがでしょう。

**山中** 残念ながら、常在菌を変化させてしまうというのはやむをえない副作用なので、妙案は私どもも持ち合わせていないというのが実際のところですよ。

## 図2 注意が必要な主な薬剤

ぜひとも避けたい薬剤

- |                                |  |
|--------------------------------|--|
| ■ 抗菌薬・抗ウイルス剤<br>ーリバビリン、キニーネ    | ■ 抗凝固薬<br>ーワーファリン                          |
| ■ 抗高脂血症薬<br>ープラバスタチン、シンバスタチンなど | ■ ホルモン剤<br>ーダナゾール、女性ホルモン                   |
| ■ 抗がん剤                         | ■ ワクチン類<br>ー麻疹ワクチン、おたふくかぜワクチン、<br>風疹ワクチンなど |
| ■ 麻薬                           | ■ その他<br>ーエルゴメトリン、ビタミンAなど                  |
| ■ 睡眠薬<br>ーフルラゼパム、トリアゾラムなど      |  |
| ■ 抗潰瘍薬<br>ーミソプロストール            |  |

**池脇** これは薬物に頼らない、ほかの方法というのなかなかないということですか。

**山中** そうですね。

**池脇** 最近では市販薬やサプリメントがよく使われていますけれども、何かコメントがございましたらお願いします。

**山中** 市販薬に関しても、やはり先ほど申し上げたような解熱剤あるいは

鎮痛剤は、例えば湿布薬でもインドメタシンが入っているものとかがありますので、これは要注意になります。それからサプリメントは、脂溶性のビタミンは妊婦さんには過剰になる可能性があります。妊婦さん用というのに限っていただく。あとは薬剤師さんと相談していただくことが大事かと思います（**図2**）。

**池脇** ありがとうございました。